青梅市文化財ニュース　第１７１号

平成１４年1月１５日

発行　青梅市文化財保護指導員連絡協議会

青梅市郷土資料室

（青梅市駒木町 1-684 ℡0428-23-6859）

岩蔵遺跡の大珠（たいしゅ）

青梅市に数多くある縄文時代の遺跡の中で、昭和２０年代から広く知られていた遺跡に『岩蔵遺跡（小曽木５丁目地内）』があります。黒沢川と小布市（こぶいち）川が合流する付近に位置するこの遺跡は、昭和４０年２月に発掘調査で、小規模ながら縄文時代中期の集落が確認され、現在、１軒の住居跡が市の指定史跡として保存されています。

発掘調査とは別に、ここから、昭和２０年代に小曽木５丁目在住の島田敬三さんの手によって、同時代の代表的な装飾品である翡翠（ひすい）製の大珠が採取されました。青梅市内での同種の遺物の発見例は少なく、丸山遺跡の２点に加え、３点目となる貴重なものです。

大珠は、重さ１７０ｇ、長さ８．５ｃｍ、最大幅４．０ｃｍ。色は淡い緑色を帯びています。直径８ｍｍの穴が、長辺側の両側から開けられています。片方は６．３ｃｍ、もう一方は３．３ｃｍ進んだところで貫通せず、その上部から穴を開けて、上下にずれた穴を通じさせた大変めずらしい例です。石材は、３つの層からなっていて、左右ともに中央部分から穴を開け始めていたものの、この層が影響したためか、穴の方向が一致しなかったようです。また、縦につないだ穴の裏面には、０．５ｍｍほどの深さで穴を開け始めた痕跡があり、現状の横方向における穴の方向とは異なり、上下方向での穴の製作を心がけたことも推測できます。また、全体を陽（ひ）にかざすと、縁の部分で１か所やや透き通る部分があって、翡翠独特の美しさが感じられます。

大珠の使いみちは、穴に紐を通して首にかける、垂れ飾りとして利用されていたものと考えられ、縄文時代前期頃に始まり、中期には盛んに作られ、副葬品としての発見されることから、重要な装飾品であったことが理解できます。

日本での翡翠の産地は現在のところ、新潟県糸魚川市の姫川支流にあるのみで、他に産地はありません。そこから数１００ｋｍ離れた青梅まで、原始時代の人々はどのようにして物の流通の場を組んでいたのか、またそれだけに無事にたどり着いたこの逸品の価値は、絶大なものであったと思われます。さらに、硬度６．５という大変硬い石の翡翠を、当時の人々はどのような技術を持って加工したのでしょうか。一説によると、管状の骨や篠竹を用い、

（裏面につづく）

砂粒を加えて回転させながら開けたと考えられています。いずれにしても、大変な時間と労力をかけて丹念に磨き、加工してまでも得たいというこの石の魅力を当時の人々も感じていたのでしょう。多くの謎を秘めた大珠は、私達に色々な勉強の場を提供してくれています。

この大珠は、平成１２年１２月に島田敬三さんから青梅市郷土博物館にご寄贈いただきました。今月末からの新収蔵品展にて展示されます。　　（文責　鈴木　晴也）